

阪神・淡路大震災をめぐる教職員・学生対話集会 — あれから1年 —

1996年1月17日(水) 15:50から本学3号館1階311号教室に於いて、全学的な行事として、大震災を振り返り、未曾有の体験を語り合う場をもつために、学生と教職員が対話するという趣旨の集会を持ちました。当日は約150名の教職員・学生が集まり、時間も約45分オーバーし、同18:00に閉会しました。

残念ながら、当初の主目的である“対話”に十分時間が取れなかったことを、この紙面をお借りしてお詫び申し上げます。

開会に先立ち、あらためて、児童教育学科で声楽・器楽をご担当いただいております猪木聡子先生、国文学科3年 鈴木弘美さん、そのほか犠牲になられた方々に哀悼の意を表し、黙祷いたしました。

(当日進行の都合上プログラムの順を変更いたしました。また、プログラム⑨の「震災によるP.T.S.Dに関するケアについて」児童教育学科4年 近松美佐さんのご発言は、卒業研究でも取り上げられておりますので、本誌では省かせていただきました。)

「阪神・淡路大震災をめぐる教職員・学生対話集会—あれから1年—」

- 1 日時 1996年1月17日(水) 15:50~17:15
- 場所 3号館1階 311教室
- 2 趣旨 全学的な行事として、大震災を振り返る。
未曾有の体験をめぐる学生と教職員が対話する。
教職員は全員参加に努める。
- 3 プログラム
 - ① 犠牲者への追悼
 - ② 学長から「大震災を振り返って」 学長 藤井昭治
 - ③ 鈴木弘美さんを偲ぶ ラクロス部の皆さん
 - ④ 対策本部としての活動と経過 対策本部長(当時の) 学生部長 宮崎和夫
 - ⑤ 震災後の日誌 庶務課 池田秀史
 - ⑥ 阪神・淡路大震災の被災とその感想 国文 辻 憲男
 - ⑦ 私の被災体験 英文 則藤 力
 - ⑧ ボランティア活動について 児教 野口益代
 - ⑨ 震災によるP.T.S.Dに関するケアについて 児教4年 近松美佐
(自身の避難所生活も含む。P.T.S.D=心的外傷のストレス障害)
 - ⑩ 被災地へ学生の安否を訪ねて 児教 但尾哲哉

自由討論(時間の許す限り皆さんの自由な発言を歓迎します。)

最後に

委員長 菅野圭昭

大震災を振り返って

学長 藤井 昭治

刻み込まれたあの瞬間というものは、薄れるどころかますます1年を迎えて鮮明になってきたような気がします。私ごとで恐縮ですが、私の家も全壊しましたし、倒れてきた書棚で肋骨2本折るといようなことがありました。倒れてきた家具の隙間から妻を引きずり出して、表に出たときに思わず《あー助かったんだな》という実感をしみじみ感じたわけです。だけど、私が受けた被害なんてものは、この震災でさまざまな犠牲になられた方々に比べれば、本当にたいしたことはないと思っております。

ただ、今度の震災を振り返ってみますと、日本が今日直面しているあらゆる問題が、集中的にこの震災を契機にして、浮き彫りにされたというふうな気持ちをもっております。政治の問題にしてもそうですし、地方行政あるいは経済問題、労働問題、あらゆる問題がこの阪神・淡路大震災で、いかに日本の国のいろんな問題が、ある意味ではいい加減だったかということがでてき、そして、いかにそれに対処するかということの力のなさというのですか、そういったものが浮き彫りにされてきたと思います。

1年振り返ってみて、復興というかけ声は随分出てきています。それはもちろんハード面のことだろうと思いますけれども、忘れてならないものは、やはりハードに対するソフトの問題、すなはち心に関係する問題、それを決して忘れてはならないと思います。人間の力ではどうにもならなかった問題から立ち直ろうとしている人々の心の回復という問題を我々常に考えていかないといけないと思います。ある人が、傷ついた人間の心は、結局ほかの人間に対して語っていくことによって、それを聞くことによって、徐々に回復するんだということを言っておられます。皆さん方一人一人の経験は、それぞれ住んでいた場所によって違いはあるだろうと思います。しかしそれぞれが、さまざまな立場でさまざまな経験をしたわけですから、結局、現在自分があたえられている持ち場というか立場で、この震災を契機にして、あたえられた教訓をどのようにいかしていくかということ、もう一度あらためて模索する必要があるのではないか。このことが、5500人あるいは6300人の犠牲者に対する、あるいは犠牲者のご家族に対する、我々に課せられた1つの仕事ではないかと思っております。こういう体験と教訓というものを、風化させてはいけない。そういう意味で本日の集会を実りあるものにしていただきたいなと思っております。

鈴木弘美さんを偲ぶ

ラクロス部の皆さん

国文学科3年 柏木 久理

児童教育学科4年 高橋 美穂子

国文学科4年 奏 麻里子

私は鈴木弘美さんとは学年が違いますけれども、地震があった当時にラクロス部主将をしていたということでここに立たせてもらっています。依頼されたのは、鈴木弘美さんとの思い出を2、3お願いしますということなので…。私と鈴木弘美さんの間で起こった出来事を2つ紹介したいと思います。

私は2回生になってからやっと鈴木弘美さんと話せるようになったんだけど、というのも、上の先輩となかなか交流が深くもてなくて、いろいろ思いあぐねてたんだけど、その機会というのは突然やってきて、ラクロス部っていうのは、朝練をやっけてずっと日なたにいたので、年中日焼けをしているっていうのが、ラクロス部の勲章であったり、またそれが一番の悩みの種だったりするんだけど、日焼け対策にどうしたらいいという先輩たちの話で、たまたま私がいて、弘美さんが、もう1つ上の肥塚さんにアドバイスをしていたのをちょこっと聞いて、エステローダーという化粧品があるんだけど、その化粧品のフルイショかフルシオンかあまり覚えていないんだけど、「それがすごくいいですよ、先輩」っていうのを聞いて、私もやってみようと思って買おうとしたんだけど、よく話を聞いたら、すごいちっちゃいのに6500円もする化粧品で、えーそんなの買えないやと思ってしょんぼりしていると、鈴木弘美さんが「クリには買えないよね」とか言って、「でもいつか買えるときがくるから。そのときはクリはすごいきれいになってるよ」っていわれて、何かはじめて深く交流をもてたのに、そんな事を言ってもらって、すごく大人になった気分になれたという話が1つと、どこの大学の子もラクロス部に入ったら必ず持っているJIBのバッグというのがあって、JR甲子園口駅から歩いて15分ぐらいのところに本店があるんだけど、そこにオーダーして、名前を入れてもらったりするんだけど、バッグを取りに行ったときに、たまたま、サーティーワンのアイスクリームの店にひろさんがいらっちゃって、それを知らずに何気なく切符を買って帰ろうとしていたときに、お店の中から一生懸命手を振る人がいて、誰だろうと見ているとひろさんで、「ちょっ

とおいで、ちょっとおいで」と言っているように見えて、スルスルとお店に入っていくと、「クリはどれが食べたい？ 何がいいかな？」って選んでくれて、アイスクリームをダブルでおごってもらったのが、「私に会えてよかったね」と言ったのが、今でも本当に忘れられなくて、今に至っています。

私は兎教の学生で、国文の学生である鈴木さんと同様につきものといえば、ラクロス部に所属しているということだけなんですけど、その中でもラクロス部は、日本ラクロス協会というところに所属していて、その中でも何かたいてい役員になって活動するのが、伝統というか。で、私たち現4回生は、2回生・3回生のころに役員なり委員なりやってたんですけれども、弘美ちゃんだけはまだそういうのに3回生のはじめごろには就いたことがなくて、私が半ば強引に、「何かやってみいひん」と誘いをかけて、たまたま私が国際親善試合というイベントのプロモーション部長になったので、強引に勧誘してスタッフにしたあげて、それで仕事をずっといっしょにやっただけなんですけど、私はわりと家が遠くて大阪の事務所までは、なかなかかよえなくて、夜も早く帰らないといけなかったんですけど、西宮に住む彼女は、毎晩遅くまで12時近くまで残って、私のやらないといけない仕事、コピーをとったりFAXを流したりこまかい作業を、全部彼女におしつけて帰ってしまうことが多かったんですけれども、いつもそのたびに、「いいよ、いいよ、私は家が近いから」って私の体まで気づかってくれて、わがままとか言ってもいつも笑顔で聞いてくれて、仕事をしていてもいつもひろちゃんが助けてくれて、3ヶ月か4ヶ月間の短い間だったんですけれども、すごい思い出が出来て…。ひろちゃんは最後に、「いろんな大学の子とも友達になれて、やってよかったよ」ってすごい笑って言ってくれたので、最初は強引にやるから申し訳ないなと思ったんですけど…。積極的にビラくばりとかポスターはりとかしたんですけれども、その中でも、警察に何回も足を運んで許可をもらってとか、何千枚とかあるビラとか一人で管理して、京都や大阪や行って来て、本当に部長の私以上に班長としてみんなを支えてくれたのはひろちゃんでした。お金のこととかまかされたときにも、大会当日にグッズを売るので帳簿もつけないといけなかったんですけれども、そのときにも、かわいいカンカンとかノートを用意してくれて、そういうこまかい気配りがよく行き届く子やったんで、そういう才能とか、絵のセンスもすごいよくて…。そういうところに私はずっと目をつけていたんで、いろんな大学にアピールしたいと思ったんで、その場に彼女を引っ張り出して、活躍できて、他の大学の人たちからもすごくひろちゃん慕われ、またみんなと遊ぼうねとか、鍋をしようね

とか言って、その約束がはたせないまま、本当は去年の1月20日ぐらいにそういうのをしようと言ってたんですけど。で、その報告をするために私は十何日か学校がはじまってからずっと彼女を探しつづけたんですけど、会えないまま17日の地震をむかえて…。で、20日に協会の連絡を通じて彼女の遺体が発見されたということを知って、本当に残念に思いました。

でも地震ていうのは自然の災害で、私たちにはどうすることもできなくて、何に対しても怒ることもできなくて、誰が起こした訳でもないし、その分誰を恨むこともないし、かえって純粹にひろちゃんのことを心の中で考えることっていうか、現実味をあまり帯びていないというか、ひろちゃんの遺影とかお墓が関東にあることもあって、お葬式にも私は行ってないんですけど、現実的なことを私は見てないので、ひろちゃんの思い出をずっと心の中にしまえることだけが幸いというか、夢の中の出来事のようなので、今でも本当にひろちゃんが死んだとか考えられないくらいなんで、かえって私たちはその事が幸せだったのかもしれないし、いつも笑い話とかそんなことばかりいいあって、ひろちゃんの話をしているときでも、ほとんど悲しいという気持ちはなくて、最後はみんなでいつも笑って終わっているような状態です。今日、本当はいろんな文章を書いてきたんですけども、ワープロの印刷が上手くいなくて、何も用意できなかったことを、すごく今は残念に思っていますけれども、またなにかの由りに公表したいと思います。以上で私の話を終わります。

今日はまず遅れまして申し訳ありませんでした。私は今日この場に立つとは思ってなかったので、何も用意してないんですが、遺影というか、作ってみました。ちっちゃくて見えないと思うんですけど、これが私たちが鈴木さんに抱いているイメージです。鈴木さんの何をイメージしたかといったら、ほんとちっちゃくて見えないと思うんですけど、クマをいっぱい貼ってみました。ここに天使になったひろみちゃんがいるんですけど、十分ではないんですけど結構、正直かなと思っていて、テディーベアっていうかクラブのマスコットみたいな存在で、いるだけでほのぼのする。そういう存在でした。私はゼミでもクラブでもいっしょで、人一倍話さないといけないんでしょうけれども、本当に何か浮かんでこなくて申し訳ありません。これを部屋に飾るので、よかったらみなさん見てください。以上です。

対策本部としての活動と経過

学生部長 宮崎 和夫

何からお話ししたらいいか、菅野さんから私にキツく守るよういわれ、与えられた4分30秒や5分ぐらいではとても話しきれないものがあります。震災当日9時20分に出勤してから対策本部が解散し、復旧対策本部に改組された2月10日までの26日間は、1日も休めず連日14～5時間を越える勤務で、大変キツかったです。特に、出勤者が少なく、いろいろとご意見や評論をお寄せくださる先生方は多いのですが、実際に出勤して仕事をできる方が少なく、かえって大変困りました。

災害対策本部としての経過につきましては、「親和フォーラム」21号に事実関係だけは、まとめて一通りのことは書いておきましたので、それをご覧おきいただきたいと思います。その中で私が感じたことや、ぜひ、お話ししておきたいことがたくさんありますが、もし、またご依頼がありましたら、書かせていただこうかと思っています。

今日は時間をもらえなかったので、その中でも特に、最も簡単なことで皆さんにお願いしたいことを1つだけにしぼって申し上げておきたいと思います。

温故知新ということばがございしますが、我々人間は過去から学ぶべきものがあるにもかかわらず、のどもと過ぎれば熱さ忘れるで、忘れてしまうんですね。私も阪神の3つの災害を体験しています。一つは、阪神大水害です。このとき私4つでした。その日たまたま私は外で遊んでおりましてケガをしまして、母親が医者につれて行こうとしたんですが、水害で水が出なくなるのです。変な話ですがほんとうなんです。水害で水道管がやられて断水するのです。そのため、病院がダメでして、母親が自分で私の手の傷口を糸で縫ってくれました。傷が今でも残っています。街路が川となり、死体が流されていくのを手の痛さを忘れ、ボー然と見ていたのを憶えています。

それから2つめは、第2次世界大戦中の神戸大空襲です。神戸市内が一斉に燃え上がる。で20万近い人々が死傷した。私、小学校の5年生でしたけれども、死体処理を手伝うというようなことをやらされました。戦争で男手が少ないこともあり、焼跡から死体を探して小学校の校庭に集めるのですが、小学生には死体は重すぎ、引きずってしまいました。子どもをかばい、子どもの上に被さるようになって焼け死んでいるお母さん、お母さんの死体のそばでボー然と立ちつくす幼児、火の海の地獄でした。

僕たちはそういうことで、子どもながらも、阪神間の2つの大災害を体験しているにもかかわらず、それから学んだことを今回の震災で、かならずしも役立てられなかったという、忸怩たるものを感じているわけであります。

しかしながら、役に立つこともかなりあるわけです。たとえば、歴史は繰り返すといいますが、私は必ずしも繰り返さないと思うんです。阪神大水害や第2次世界大戦の神戸大空襲と今回の震災ではちがうところがいくつかありますが、一つは、科学技術の進歩がまるで違う、TVもなかった。しかも、戦時中のため政府は、被害の報道を押さえてしまい、したがって、他所からの援助はまったくなかった。

最大の違いは、今回はすぐ、今記録がとれるということです。神戸大空襲についてほとんど記録がありません。戦後30数年たってから、やっと「神戸大空襲を記録する会」が発足したような状態でした。今回は記録がとれますね、でとろうとしています。だから正確な問題把握ができて、そこから我々は学ぶことができますね。それを次の災害が、なければいいんですが、あってもそれを乗り越えるだけの学ぶべきものを、きちっと整理をして、それを皆さん一人一人がしっかりと自分のものにするのだと思うんです。

3つの大災害を体験しまして、共通して言えること、それは自分の身は自分で守れということですね。第2次世界大戦の時もそうですが、行政や軍からいろんな訓練を受けました。バケツリレーも教えられました。救急看護も習いました。しかし、大人たちは、我々子どもを助けてくれなかったんです。あの時に、僕の友人で両親を失って戦災孤児になった者が随分でしたが、長い間放置され、浮浪児になってしまいました。栄養失調で多くの子どもたちが死にました。野坂昭如の「螢の墓」に出てきますが、1粒のピーナツを兄と妹で分け合う場面がありますが、あの限界状況の世界ですね。それを僕は思い出しております。

その時も思ったんですけど、大人も行政もそれから軍も守ってくれませんでした。自分の命は自分で守らなければしょうがないですね。今回もそうだったと思うんです。また話の中ででてきたらお答えしますが、私の同級生ですずっと大学もいっしょだったんですが、皆さんも講義をお聞きになったと思いますが、上川前神戸市消防局長。（*上川庄二郎前神戸市消防局長には、本学の学際科目B「震災に学ぶ」で講義をしていただきました。）彼も忸怩たるものがあるようですが、助けようとしても助けられない限界があるわけですね。行政側にも。

ですから、話をもとにもどしますが、今回の皆さんのいろんな貴重な経験、体験を記録にしておくことは、大変意義のあることだと思います。財産や家財というものは、ある程度補いがつくでしょうが、命だけはどうにもならないですね。ですからなんと

いっても一番大切なことは、自分の命、それから家族の命、自分の手の届くまわりの人の命をまずは助けることです。そのためには、自分の命は自分で守る。これは21世紀になってもおそらく変わらないと思うんです。そのために自分としては何をすればいいかということ、今日の対話集会、その後に刊行されます「震災の記録」、あるいはいろんなところからたくさんの記録が出てますね。できるだけ読んでいただいて、そこから学ぶべきものをきちっと学びとって、自分のものにしていただいて、忘れがちになりますがそれを忘れないように、次の世代へつなげていくことが、それが今生きている、あるいは今回の震災を経験した者の責務だと思うんです。そのあたりを今日の集会できちっと、実りあるものにまとめていっていただきたいと思っています。以上です。

震災後の日誌

庶務課 池田 秀史

震災後の日誌ということなのですが、大学がどのように対応していったかということが中心になった話・日誌になると思います。だいたい1週間ぐらいをまとめてみました。読み上げるだけになると思いますけれども…。

17日、地震がおきまして、私は7時ぐらいに大学に来たんですが、事務局に入ったときは、ほとんど被害はなかったんです。見る限りでは全然大学においては被害はないもんだと思いました。揺れは大きかったんですが、このような被害があるとは思ってなかったんです。それでもとりあえず、大学中を見廻りまして、大学の破損状況の確認をしました。それから他の職員も出てきてくれましたので、出てきた教職員で学内を再び見廻りました。その日は、学生や受験生からひっきりなしに電話がかかってきまして、1日中、大学内の見廻りと電話の対応におわれてしまって、他のことはほとんどできませんでした…。神戸市内の状況が把握出来たのが昼過ぎで、テレビが見れる状況になりまして、見たら阪神高速が倒れている、そういうことがわかって、これはたいへんだということになったのです。しかしわかったからといって、出て来る教職員も少なく、その日は電話の対応に明け暮れたという状況でした。

18日には大学に出勤できた教職員で、緊急会議を開きました。この時点で「28日まで休講、21日実施予定であった特別選抜入試の日程を2月4日に変更」ということを決めまして、受験生に電話でこちらから連絡を行いました。それとはがきで、教職員および全学生に連絡。この時点でどういう連絡が一番よいのかわかりませんでした。電話連絡はとうてい無理。その日の夕方に、教職員および全学生に郵送しました。その他、電話では教職員に対しては、こちらから電話連絡を、かかるかからない、わからないですけれどもずっとかけておりました。また、この時ラジオは、震災後も放送していましたので、FAXで入試が変更になったということの放送依頼、また新聞社には、被災見舞いをかねて、入試、休講の掲載をこの日に依頼をいたしまして、20日の神戸新聞と朝日新聞に載っています。

19日です。猪木聡子先生が被災され亡くなられたことの通知がこの日に入りました。この日の昼には、電報を打つ手はずをとりました。また、交通状況確認のために、神戸電鉄の方にこちらから電話をいれましたところ、その日は鈴蘭台以北はすでに開通。

湊川—鈴蘭台は不通という回答がかえってきています。大学への交通をどうするかということも、会議を開きこの日検討しています。午後3時より、大学に出勤できた教職員のうち5～6名で、学生および他の教職員の安否を確認するために、車およびバイクで下の方、つまり灘区・東灘区・長田区・西区の方に出発しています。3時ごろ出たんですが、渋滞とかいろいろありまして、皆さん午後9時～10時頃に帰ってきています。今から考えると、19日ぐらいからやっと、学生に安否に関する電話連絡や、電話してきた学生に対してどのようにしなさいという指示が出来てきたように思います。

20日金曜日、大学に出勤できない教職員が、大阪で集会を持ちました。この日に、国文学科の鈴木弘美さんが生き埋めで救出中であるということと、英文学科の松村麻里砂さんが重体であるという情報が入り、すぐ大学の方から担当の先生の方に連絡をしたということが記録に残っております。

21日です。鈴木さんが亡くなったという連絡が入りました（宮崎本部長には20日夜に連絡あり）。また松村さんの入院されている病院がわかりました。

22日です。このころからやっと電話等で受けた情報を、整理できる体制ができてきて、安否情報の整理を行っています。またこの日、FM神戸・FM大阪に学生にむけて放送、内容は、「神戸親和女子大学のみなさんにお知らせします。1月28日まで休講です。それ以降のことについては、大学より連絡しますが、もし連絡のない場合、大学、又は、教職員に電話で問い合わせして下さい。大学（078）591-1651 神戸親和女子大学」を流していただくように依頼しております。また、この日も数名の教職員、が教職員および学生の安否確認のために大学を出発しております。この日は児童教育学科の但尾先生といっしょに私もちょっと外に出ることになりまして、灘区・東灘区の方を廻ったんです。車で六甲の裏道を通って行きましたが、降りるのにだいぶ時間がかかりました。まず、神戸大学の国際文化学部の方に行きまして、そちらの避難所を見ましたけれども、知っている人は誰もいない。次に親和中・高に行きまして、先生方と少しお話しし、その後、高羽小学校に行ったんです。そこで国文学科の辻先生が避難していることが確認できました。

また本学の学生がそこでボランティアをしていましたので、張り紙（大学へ連絡するという事）をお願いして、そこを出発しました。その後鷹匠小学校、成徳小学校、甲南小学校・幼稚園、甲南大学等廻りました。甲南大学にも本学の学生がいました。最後に児童教育学科の野口先生のお宅に行き、水をおいてきました。何もなくて2～3時間で廻れるんですが、1日仕事になってしまいました。

23日です。引き続き学生の安否確認をしております。この時点で、71%の学生の安

否確認が出来ています。またこの日、再度ラジオ局へさきほど読み上げました放送を依頼しております。この日、電話がかかってきた場合の対応は、以下の3点です。

- 学生の安否、家族、家屋について確認。
- 28日まで休講、26日以降に詳しい日程を連絡する。
- 定期試験、講義の中止。4回生は口頭試問の中止。

この日も教職員が2グループに分かれて各避難所を廻り、張り紙、放送をしてもらって学生および教職員の安否確認を行っています。

24日火曜日。再々度ラジオ局へ放送依頼。この日は5グループにわかれて教職員と学生の安否確認をしています。学内では引き続き学生の安否調査を整理し、24日時点で90%の学生の確認が出来ています。

私がまとめていますのは以上1週間です。この後もいろいろあり、もっといろいろ話したいこともあるんですが、時間もありませんので…。ただ思ったことは、はじめのうちは出勤可能な教職員が少なかったんで、どうなるのかなという不安がいっぱいあったんです。また、出てきた教職員でいろいろやったんですけども、いろんな点で、不備があったんですが、精いっぱいやったと思いますので、学生の皆さんには、ご迷惑をおかけしたと思うんですけども、この点は理解していただきたいと思います。以上でおわらせていただきます。

阪神・淡路大震災の被災とその感想

国文学科教員 辻 憲 男

ゆうべ、うちの下の子供（小学1年生）は、あくる朝、地震が来るのではないかと怖がってなかなか眠れませんでした。

私もその時の恐怖、後遺症がよみがえって来まして……。今日は申し訳ないんですけども、あんまり多くを語る気持ちになっておりません。

ちょっと、へんこつなこだわりなんですけども、地震をまだ突き放して語るということが出来ません。地震のことについて何か書こうという気持ちにもまだなっておりません。

当事者で、地震をひきずっているからだと思います。もちろん、私の被害などは、亡くなった人や、肉親を失った人や、死に目に会った人や大ケガをした人に比べると非常に軽いものです。でも、まだしゃべるのは正直つらくて、何とか忘れたい体験です。

あの時は、とてもみんなが優しくなれました。そばに人がいるということがほんとに嬉しかったんです。みんな、心打ちひしがれた被災者でした。

でも傷ついた心と云うのは、結局つらい、苦しい体験をした人にしかわからないことでした。それを解かると云ってしまうのは、ごうまんだと思います。

奥尻島や島原の時でも“大変だなあ”と私は思いましたけれども、私もテレビを見ている傍観者にすぎませんでした。

この度でも、私が被災をしていなければ、やっぱり傍観者にとどまったと思います。例えば、震災とオウムとを並べて語るという姿勢がマスコミにはありますが、正にそれです。当事者はテレビなんか見てない、見られないと思います。

結局、地震は、個人個人、1人の問題です。

地震全体がではなく、“私” “ワタシ” という1人1人にとっての“地震”が問題なんです。

今、思うと地震の1週間程後は、私は無力感だけの避難民だったと思っています。年寄りと子供を、とにかく安全な所に移さないといけない。私の家はもちろん、神戸は危険だと……。鈴蘭台も、これは危ない、安全ではない。

とにかく遠くへ逃げようという気持だけしかありませんでした。大きな余震が来る

と云ってましたので、親戚が丹波の山奥にありましたので、そこまで逃げまして、厄介になって、そこで古家を好意で借りまして2ヶ月程暮らしました。そこから大学へ通いました。

子供も田舎の学校へ転校させまして通わせました。ここへ通う（鈴蘭台）間は、地震のことを片時、忘れることが出来ましたが、1週間に1度、管理組合の理事をしていたものですから、谷上から新神戸へ出ると気分が悪くなって、神戸の町の方へ出ることが出来ませんでした。イヤでした。4月になってやっと西宮へ家を見つけまして、引越しをして大学も始まって、私のもとのペースで仕事が始まったと思っております。

阪急六甲の親和女子高校のすぐ上にありますマンションで178戸あります。あのあたりで一番大きな所なんですけれども、特に私の家のあるところを見るも無惨にこわれて、それからすぐ近くの所から、あくる朝火事が出まして、もうこれで自分の家は終わりだと思えるような体験をしました。建て替えということで住民総会はずいぶん紛きゅうもしましたが、ようやく、建て替えということになったところで、管理組合の理事を私はやめました。

住民の中には建て替え反対の方もありまして、住んでる場所によって補修でいけるという場所も（お家も）あるんです。

私の家のところは、住むのも危険な状態です。

家がなくなった者の気持ちは、やっぱりわかってもらえないのだと思います。わかれというのも、さっき私が奥尻島の例をみた時と同じでして、わからないのは仕方ないのだと思います。

マンション再建は数年先になると思うんです。けれども、そのころになって、やっと私も少しはこういう席で地震のことが、私事として、お話が出来るんじゃないかと思っております。

今日は、あんまりお話が出来ませんで申し訳ありません。

私の被災体験

英文学科教員 則藤 力

今日話すのは、本当は辻先生と同じように、余り話したくなかったんですが、それにまだ心の整理もついてないし、同様にいろんな被災をされた方々に比べれば、私なんかはまだまだ軽い被災だと思っています。

でもこうして皆さんが集まった折りに、そういうことを心にとどめていただける値打ちがあるのかどうかは解りませんが、ちょっと震災当日前後のことをお話ししたいと思います。

私の住まいは、東灘区の本庄町、と言っても場所がわかりにくいと思いますが、あのテレビ・ニュースで報道された阪神高速道路が100メートルにわたって倒れていた、あの北わずか100メートルくらいの所にありました。

私はマンションの1階に住んでいまして、実は、こんなことを言ってもなかなか信じてもらえないのですが、いつも私は8時に寝まして、朝2時に目が覚めるんです。それから書斎で仕事をして、いつもなら6時には起きていて、書斎で仕事をしているんです。

ところが前日は出かけていて、たまたま遅くなり、晩の9時半頃帰ってきました、例によって晩酌をしながら湯豆腐をつついて2時間くらいかかりました。床に入ったのが12時近かったと思います。で、地震が起きた5時46分というのは、本来なら目が開いている頃なんですけど、その日は何故か目が覚めませんでした。

いきなりドーンという何か背中を丸太で殴られたような衝撃で目が覚めました。隣で寝ていた妻の「地震や！」という声が聞こえたんですが、私は瞬間<地震>ということは考えられなかった……すぐぱっと跳ね起きたんです。そして大変なことらしいから、とにかく外に出てみようと思ったんですが、立ち上がったとたんにもものすごい、激しい縦揺れなんですね。とても走って外に出ることができるような揺れ方ではないんです。

「布団をかぶって伏せろ！」と言ったんですが、しばらくは縦揺れと横揺れが交互に、まるでコンクリートミキサーの中に放り込まれたような衝撃というか、と言うよりも、そのときでもまだ私は地震だという感じが全然していなかったんです。何かとてつもない異変が起こったんじゃないかと一想像もできないような異変だと思っています。

ました。とにかくその揺れ方というのは、どう言ったらいいか、巨人がマンションを抱えて引っこ抜こうとして、〈縦横〉に揺すっているという、そんな激しい揺れだったので、私は地震という気がしなかった……というのは、これまでの地震というのは、震度4というのは2回くらいは経験して、大体、ユサユサとした横揺れなんですけども、今回のような激しい縦揺れというのは、初めてのものです、地震とは思えなかったんです。

伏せている間中、食器やグラスが雪崩のように落ちるのが聞こえているわけです。ガシャガシャガシャーンと……。私は食器とかそういった陶器が好きなのでいつも集めていたわけです。一間の食器戸棚から、雪崩落ちる音がずっと揺れている間中しているんです。

もう一つはグラスですね。ワイングラス、シェリーグラス、ブランディグラス、そういうグラス類を入れている戸棚もガシャンガシャンいっているんです。これは迂闊に動けないと、その瞬間、そう判断したんです。というのは、昔、高校生の頃、家が火事になりまして、逃げ遅れて2階の屋根から飛び降りたんですが、そのときにガラスの破片で足を切りました。後で病院に行ってそのガラスの破片をピンセットで一つ一つ抜くという痛い経験をしたので、あの地震の時も、とてもこのガラスの割れている音を聞いていて、飛び出すという気にはなれなかったんです。

それにしても、これ以上揺れ続けたら、鉄筋コンクリートであっても潰れるかも知れないな、という感じがし始めまして、何とかもう止まってくれ、いい加減に止まってくれ、と祈るような気持ちでした。その時、バタバタッと三方から襖と障子が一斉に倒れてきたんです。かぶっている布団の上に当たるのがわかるわけです。その瞬間、バギバギッという音と、ギシギシッという音がしまして、コンクリートにひびが入る音かなと思いました。「あっ、これは潰れる瞬間かも知れない」と、そんな感じがしました。そしたら少し揺れが小刻みになって、ブルブルッという小さい振れになって、「これで終わった」、やっと止まってくれたと思ったんです。で、すぐ懐中電灯を探したんです。というのは、私は懐中電灯をいつも枕元においておりました。

これは多分父親がいつもそうしていたからだと思うんです。というのは、昔、台風がよくありまして、電線が切れるんですね、台風で一真っ暗闇の中で父親が懐中電灯を持って走り回っていたのを、子供心に覚えていたんでしょー神戸に来てからはそんなことはないんですけども、何故かいつも懐中電灯は枕元においていたんです。

というわけで、大体この辺りだろうと見当をつけて、手探りで探すことができました。で、パッと点けて居間の方を見ると、すさまじいグラスと食器類のかけらの絨毯になっているんです。とても動けるものではない。ですが、余震が来るかもしれないと思っ

たので、脱出する道を作ろうと思って、スリッパでかき分けながら玄関の方へ行こうとしたんです。ところが、玄関に通じる居間のドアのところまでやっとたどり着いて、開けようとするとなブが馬鹿になってしまって開かないんです。で、これは参ったと思ってベランダの方へ出ようと引き返して、ガラス戸を開けようとするんですけど、開かない。一瞬、「しまった、これは閉じこめられたかな」と思ったんですが、いざとなれば、椅子ででも割って出なければ仕方がないかなと考えながら、もう一つの方をやってみると開いたんです。それでベランダに出てみると、隣の人の声がするので、「大丈夫ですか」と仕切越しに声を掛けると、「大丈夫です」と……

実は私のところは、道具箱を書斎の戸棚においていたのですが、書斎は本箱が倒れていて全然開かない。それで隣の非常用の仕切を破ってもらい、道具箱を借りて、千枚通しを使ってドアのノブを押し込み引っ張って開けたんです。

これで、やれやれ外に出られると思ったところが、玄関まで行くと、あの鉄の扉がグシャッとひしゃげてしまっていて、押せども押せどもとても開くものじゃない。で、事情を隣の人に話すと、「どうぞ家を通して出入りして下さい、うちはたまたま玄関が開きますから」と親切な申し出があって、有難かったですね。

いずれにしても、余震が来たときに靴を履いたままでも動けるぐらいにはガラスを片づけようと、特にワイングラスというのは、あれは割れると凶器なんですね。あの足というか、棒の部分が、あの先が尖っていて非常に危ない、靴を履いていても。これを片づけないと余震が来たときに動けない、そう思ってまずは破片を片づけようということだけで頭がいっぱいでした。

後から考えると不思議なんですけど、外のことがどうなっているのか全然考えなかったんですね。でも、自分では、まあ、落ち着いているつもりでした。というのは、いつも、菓子が入ってる缶がありますね、それにラーメン（チキンラーメンです、理由は水がなくても生でかじられるから）と、クラッカーと、チョコレートをいつも入れて、押入の手前のところに直ぐ出せるように入れていたんです。この話をすると、皆「予知していたのか」と聞かれるのですが、そうではなく、私も神戸では地震は起こらないと思っていました。

でも万が一何かの時に、要るかもしれないと思って、いつも妻に用意させていました。それで、食料はあるから1日や2日は何とかもつだろう、という落ち着きが自分ではあったように思うんです、その時は――

そこでとりあえずニュースを聞いてみようと、どこが震源地なのかと思ってラジカセを探し出すと、私はいつもは電池を使わないので聞けないんです。それで時計とか目覚まし時計の電池を皆抜いて、ラジオに入れてNHKのニュースをつけたんですが、

まだその時はどんな状態なのか全然つかめないんですね。

私も外のことは気にはなるけれども、そっちの方に意識は行かなくて、とにかくガラスを片づけようと、破片を片づけようということばかりで、1日目は段ボールに破片を詰め込んで庭へ運び出すことで終わったんです。2日目になってもガラスは片づいていなくて、段ボールに約10杯ぐらい破片があったと思うんですが、それが3日ほど続きました。

3日目に妻の弟妹が大津と豊中にいるのですが、駆けつけてくれました。水や食料や電池やコンロですね、燃料などをいっぱい背負って、西宮北口から歩いて持ってきてくれたんです。あの時の感激—自分のところは食料が何とかあるからという安心感はあるものの、何がどうなっているのかよく判らない不安感もあったものですから、遠くからわざわざ歩いて持ってきてくれた、あの感激は本当に忘れられません。

3日目、やっと片づいたので、西宮に姉が2人いますから、心配だったもので、昼から国道沿いに歩いて行ったんです。その時初めて私は、外の方がどんなになっているかということを知って、愕然としました。特に本庄町のすぐとなりは芦屋の津知町というところで、新聞でも何回も連載されたので、覚えておられると思いますが、あの辺りは殆ど全滅に近く、見るも無惨な潰れようでした。

芦屋川を越えて夙川の方まで歩いて行ったんですが、姉のところまでたどり着くと、幸い地震の一年前に建て替えたおかげか、周りはみんな潰れているのに姉の家だけがポツンと灯台みたいに立っている。近づこうと思っても潰れている家が道を塞いでいて通れない。どこか近づくとこがないかと思って、周囲を回ってみても、どこからも近寄れないんです。大声で呼んでも返事がない。潰れてないから大丈夫だろうと思いながら、もう一人の姉のところへ行けば、消息が分かるだろうと思って更に歩いたわけです。

その時に戎神社の横を通ったんですが、神社の鳥居が折れており、かなり被害を受けている様子でした。例のテレビ・ニュースで映っていた、高速道路がちょんぎれて、バスが宙ぶらりんになっているところを通ったとき、もう一人の姉のところはもっと危ないかもしれないと感じたんです。家も古いし、しかも建て増ししているものですから、非常に弱い構造じゃないかと心配になったんです。ところが、行ってみるとそこも、まあ、何とか無事だったのと、立ってはいるが、どうなっているのか分からなかった姉の一家は、息子のいる大阪へ脱出したとのことで、安心して帰って来たわけです。

それにしても、初めてその時に被害のひどさを目の当たりにしたわけですが、先程辻先生も言われましたけれども、私も北海道とか東北とかで地震がある度に、ニュー

スを見ては、気の毒だなと思いながら、やはり傍観者でしかなかった、自分が体験したと言っても、まだまだそういう人たちに比べれば、自分の体験というのはそれほどではない。とは言いつつも、何か変な、鬱屈した気持ちにいつも襲われています。

ところで、その後のマンションの方は、辻先生のお話にもありましたように、各家庭でいろんな事情がありますし、なかなか巧く進みません。ただ、気をつけたのは、派閥を作らないように一建て替え派と修理派とですね、反目し合う、これは何にもならない、動きが取れなくなる。つまり財産を失うことになりかねない。そのことに細心の注意を払おうと、復興委員会で申し合わせまして、少しずつは動いているんですが、結局、国や県や市のそういう対応の仕方が官僚的で、時間との戦いというようなことを毎回毎回やっているわけです。

難しいマンションの中では、1番トップを走っている方だろうと思うんですが、しかし、建て替えることは一応決まりましたけれども、まだまだ道のりは遠いのが現状です。

体験を話しても何にもならないとは思いますが、ただ、私がこの度、忘れていたことと言いますか、人間誰でもそうだと思いますが、意識することなく生きているわけで、今回の地震で私は、当たり前のことですが、私たちはいつも死と隣り合わせで生きているんだということを、はっきりと肝に銘じることが出来ました。以上です。

ボランティア活動について

児童教育学科教員 野口 益代

「ボランティア活動」については、本学では田川先生がいろいろな事をご存じで、様々な問題点もしっかり把握していらっしゃるから、田川先生が適任だと思うのですが、先生は震災対策のボランティア班ではなかったようで、素人の私が話すことになってしまいました。

私が何かしたいと思いましたが、私自身が魚崎（東灘区）という激震地で被災したからです。周囲は8割が全壊。我家から三方（東・西・南）へ通じる道は、倒壊家屋ですべてふさがれ、幹線道路に出ることもできませんでした。そういう周囲の状況にあって、不思議にも私の家は倒壊を免れたのです。無数のひび割れ、東側へのわずかな傾斜、玄関ポーチの柱2本の切断などはありませんでしたが、とにかく立っていたのです。ご近所の人達は一旦灘校に避難されたのですが、そこが遺体の安置所になったので帰れる人は帰って下さいと言われたそうです。あの激震に耐えたので多分大丈夫ですからと言って我家に避難していただきました。私の家が潰れなかったのは、家の北側半分が平屋のアトリエだったおかげです。アトリエを建てる時に、彫刻の素材として梁に1トンぐらいの木を吊ることがあると申しました。そうしましたら、3間×4間のアトリエなのですがすべての梁に、^{ほおづえ}頬杖、火打ち梁という斜の材が連結され、基礎も床も重量に耐えるものにしてありました。

北側に彫刻の職場として平屋のアトリエがあったおかげで命拾いをしたように思います。

あの日アトリエは、ありとあらゆるものが倒れ、棚の物は落ち、足を踏み入れる余地もありませんでしたが、何とか4家族の集まれる空間をつくりました。私はふだん人から「原始的ね…」と言われるようなところ（電気炊飯器を持っていないなど）がありました。それが幸いし、17日の夕刻には、固形燃料で炭火をおこし、ひびの入った七輪と火鉢で玄米がゆと、具だくさんの汁物を作って、皆で分かち合うことができました（水も前日に30リットルの地下水を汲んできていました）。

17日の夜、外は月明りで皓皓としていましたが、家の中は懐中電灯なしには歩けません。床にはありとあらゆるものが散らばって壊れていましたから、廊下も畳の上もすべて靴を履いたまま。火事が起きる心配もあったので、いつでも即逃げられるよう

に、着の身着のまま、オーバーも着て、ポケットに懐中電灯を入れ、寝る時も靴を履いたまま布団に潜り込みました。アトリエは5ミリの厚さの窓ガラスが南北ともに割れ、屋根こそついていましたが、気温は外気とかわりません。しかし家の壊れた人々のことを思うと、ほんとうにありがたいことでした。

また一人だと心細かったことでしょうか、ご近所の人達が避難して来て下さったおかげで、あのすさまじい混乱の日々を乗り切ることができたのです。ほんとうにたくさんの方があたたかい心で支えて下さいました。例えば道を歩いていると、茨木方面の方が、橋の欄干のところで、「もうじっとしてられなくて、とにかく何かしたくてやって来ました」と、通りすがりの人にあたたかいお茶をサービスして下さいます。電気も水もガスもない時に、熱いお茶のサービスがどんなにうれしかったことか…。

私の家は幸いにも残ったのですから、地域の人に開放しようと。アトリエは後に井戸端会議の場として、またけっこう賑わった喫茶室でもありました。あの当時最も困ったのがトイレでしたから、住吉川から水を運んで浴槽にため、バケツで流すようにしてトイレも使ってもらいました。友人や姉兄弟は、電車がまだ甲子園、西宮北口までしか来ていない時から野菜などの食糧を苦労して運んでくれました。水道が通ったのが2ヵ月後で、洗い物の水には不便していましたが、洗い物が少なくてすむように、また寒い時期でしたから具だくさんの熱い汁物が喜ばれて、来る日も来る日もそんなものを作っていました。我家に避難していた人たちが、社宅やご親戚に移られてからは、ご近所11軒分の移転先を聞いていたので、安否を尋ねて来る方々への応対や、家財回収にもどって来られる方々のために家を留守にすることができなくて、大学へ出勤できるようになったのは震災後1ヵ月もたってからでした。出勤しますと、それぞれに震災対策の役目がありました。私は現場で活躍する多くのボランティアの人たちに出会っていたので、何か出来ることをと思いボランティア班に入りました。

そこでは曾和先生や非常勤の香曾我部先生が、神戸親和女子大学としてまとまりのある活動の可能性を模索して下さいました。2月末頃になると、全国から集まって下さっていた大学生ボランティアの人たちが、年度末、新学期にむけてボツボツ後退をはじめ、地元の学生が引継がなければならない時期に来ていました。

そこで「神戸親和女子大学青空保育園キャラバン隊」の結成を提案し、呼びかけをしたのです。

神戸親和女子大学としての活動は、◆長田区の片山児童館で、避難中の子どもたちおよび学童保育の小学生たちを対象とした保育活動と、児童館に隣接した老人憩いの家に避難中の人たちを対象とした炊き出し、物資配布等の援助活動。◆灘区の成徳小学校の「なかよし教室」(東京農工大学キャンプオリザより引継ぎ)での活動、◆巡

回こどもセンターまつりへの参加、◆神戸わんぱく子ども祭りへの参加。(池田さんや平尾さん夫婦も参加して下さいました。)5月の冷たい雨の中、ふかひれスープのゆーめんは大好評で、300食が2時間たらずで飛ぶようになってしまいました。

その他、学生有志が鈴蘭台駅前で街頭募金を呼びかけ、30万円をこえる金額を神戸新聞社を通して寄付していますし、また避難所に洗濯機11台(うち2台は寮から提供)を送りました。

これ以外にも震災直後より、各地のボランティア団体等に登録して独自に活動した学生は、かなりの数に上るでしょう。

今度のような大災害に対し、学生のはたす社会的役割はほんとうに大きかったと思います。全国の学生ボランティアの皆様から心から感謝いたします。

4月以後、60人にもものぼるボランティア登録者の組織化について、他大学との連携を考えたり、再三親学会とも検討しましたが、リーダーになって下さる人がなく、またコーディネートすることのむずかしさにぶつかり、結局大学内に拠点をつくることはできませんでした。しかしカリキュラムにボランティア実習が組み込まれることになり、震災時のボランティア精神は一步前進して受け継がれることになりました。

近所のおつきあいと助けあいの延長にあるともいえるボランティアが日常化し、近づく21世紀の共生の時代につながっていくことを祈って、私の言葉たらずの報告を終わります。

被災地へ学生の安否を訪ねて

児童教育学科教員 但尾 哲哉

幸い私は大阪に住居がありますので、直接的な大きな被害はうけておりません。今からお話させていただく中で、ひょっとすればマスコミ的な、第三者的な感覚でしかお話しできないかもしれませんがお許し下さい。

17日私は、母親と焼肉を食べに行く約束をしていました。母親はダイエーに勤めております。ダイエーは、1995年は年始から営業していました。17日を休日としたので楽しみにしていたのですが、残念ながら17日震災が起こってしまいました。朝8時頃、母親から電話がありまして、ダイエーから急きょ店を開けるよう連絡があったということでした。本部とのオンラインで、電話回線などはまったく関係なく、ポンと連絡が入ったら従業員全員出勤、テナントも出勤で店を開ける。組織力の大きさ、強さというものが、こういうときに役立つのだと痛感しました。17日の午前中も私の家の方に学生や教職員の方から、どんどん連絡が入りました。幸い大阪ですので電話が通じておりました。大阪にいたら何をしてもいいのかわからないという状態でした。地震の直後テレビをつけたら、「奈良でおばあさんがけがをしました」これが、私のテレビをつけて一番に見た速報でした。「え、これだけ大阪が揺れたのに、地震でそんなもんか」と。女房は東京で長い間仕事をしていたものですから、地震に慣れてしまっていて、地震が起こったときにも、何ら反応してくれませんでした。寝てました。いや、本当です。それが実態です。慣れてる人って、そんなものです。17日は、一日中テレビをつけていました。私の住んでいるのは、商店街のどまん中にあるマンションの5階なのですが、何をしてもいいのかわからず、うろうろしているだけ、ふとベランダを開けて神戸の方の空をみると、炎とまではいいませんが、ヘリコプターが飛んでいました。とにかく、ヘリコプターが、どんどん、どんどん飛んでるんです。テレビでは、長田の方の火事のことや、どんどん放送されているんです。ところが、私の住んでいる街では、焼肉屋がもう商売をしてました。私が住んでいるところは、何ら関係なかったんです。下から（焼肉屋は遠いのですが）、うどん屋の匂いがぷーんとしてくるんです。その日の夕方には、学生か、あるいは会社帰りの人か、酔っぱらった声がワーワー聞こえてきていました。でも、ほんの50km向うでは、すごいことが起きている。でも、どうしようもなかったんです。今考えれば、何故、動かなかったの

かという自己反省もありますが、あの時点では、本当にどうしようもなかったのです。20日の日に大阪で会議を持とうという連絡が、桜井先生と菅野先生からありまして、「おい、とにかく一回、大学の様子を見てきてくれへんか。行けるもんやったら、行ってきてくれ」。そこで、井関先生にご連絡したら、行ってみようということになり、井関先生と19日、たしか昼前には大阪を出たのですが、大学へついたのは、夜7時か8時くらいになっていたと思います。とにかく道という道が混乱、あるいは閉ざされていました。私は17、18日と私に関わる学生、ゼミの学生、クラブの学生に、とにかく電話連絡をとっていましたが、どうしても連絡がとれなかったのが長田と須磨の地域の学生です。彼女らの顔をどうにかしてみたい。学校に着いたのは夜でしたが、その足で長田の方へ下りて行きました。まだ、窓を開けて走っていますと熱風が、風にあおられた熱気が吹きつけてくる。下に降りて地面をさわるとまだ熱さがわかりました。残念ですけど、道路脇に横たわっている方のそばで、ご家族の方が泣いていらっしゃるという光景を見ました。

1人めの学生のところを訪ねたときにびっくりしました。テレビで見たものとはちょっと違うぞと感じました。彼女が避難していたのは、これまた組織力の大きいある団体に関わる避難所でした。びっくりしました。そこへ行って、「〇〇町の△△さんがここにいるってきいたんですが」と言えば、もう名簿ができあがっていて、「〇〇町の△△さんは×号室におられます。すぐ呼んできます」と言って、彼女を連れてきてくれました。でも、もう彼女の目には、活気はありませんでした。本当に活気のない目で、「泣きたかったら泣けよ」と言いたいぐらいでした。でも、そこに避難していらっしゃる方は、みんなそうだったと思います。泣きたいけど泣けない状態だったと。涙なんかありえない状況だったと思います。ポンと肩を叩いて、「おい、泣けよ」と言ったら、もう崩れてしまいそうな目をしていました。彼女に、「何かいるものはないか？」チョコレートや、その他のものを車に積んでいましたので、「とにかく欲しいものがあれば言えよ」と言うと、「何でもあります」。「チョコレートは？」「あります」。「水は？」「あります」。「カップラーメンは？」「あります」。後で知りましたが、やはり組織力ですね、その団体の組織力です。私の友人もその団体に属していて、聞きましたら、もう17日の昼過ぎには、彼のいる支部からもトラックを何台も出したということでした。そこでも非常に組織力というものの偉大さを痛感しました。

次に、小学校へ行ったのですが、はじめは彼女がその小学校にいるかどうかわかりませんでした。とにかく避難所がどこにあるかわからない。まったくわかりませんでした。先の避難所で「実は、この辺りに学生がいるんですが、その避難所はわかりませんか」と尋ねると、「さあ、それは行ってみないとわかりませんよ」ということで、

何本めの道を右に曲って……。ところが町に電気はないし、当然、電信柱についている住所表示も役に立ちません。電信柱は倒れていてなんにも手掛かりがない。住所がわかっている、何の役にも立たないというのが実態でした。彼女の家の前にどうにかたどり着いてぱっと見たときに、「あ、彼女はどこの病院に入院しているのかな」、というのが第一印象でした。そこで茫然としていると、近所の方から「ご親戚の方ですか？お知りあいの方ですか？」と尋ねられたので、「実はこうこうで娘さんの大学からきました」と説明しますと「〇〇ちゃんは、あの小学校にいますよ、是非行ってあげてください」ということで、すぐ飛んで行ったんですが、そこは、先ほどの団体の避難所の場合とは全然違いました。だれがどこの部屋にいるか、名簿も何も整理されていません。物資はというと、不足している。あまりたくさん物資を持っていませんでしたが、まず彼女に、「要る物は何だ」と聞くと、彼女は牛乳が欲しいということで、牛乳を置いてきたような記憶があります。まだ少し物資の残りがありましたので、職員室へ行き、これくらいの物資がありますと言えば、「ああ、もう焼け石に水です。あったらけんかします。取りあいになるだけだと思いますから、どうぞお持ち帰り下さい」ということでした。それでも、「せっかく持ってきてるんですから、どういう分け方かはそちらにお任せしますので、とにかく置いていかせて下さい」とおねがいして、置いてきました。

それから、一旦大阪に戻りまして、そういう状況を梅田に集まった大阪方面に住んでおられる先生方に、ご報告させていただきました。そのときに思ったのが、何かせにゃならんと、家でじっとしててもしゃあない、と思って、その日の夜にもう一度、神戸の方へ出てきて、学生の安否をずっと確認していました。何ができるかですね。自分に一体何ができるんや。野口先生のお話にもありましたが、本部にいてコントロールする、そういう人も必要です。でも、実際に現場に出て行って、何かせねばならん人間も必要なんだ、とそのとき自分で判断しました。自分は、とにかく被災地へ出ていってみようと、多くの方々の手を煩わしながら、連絡のつかない学生に、どうにかして連絡したいと思いました。車では無理だと思い、とにかく単車が欲しい、二輪車であればどうにか行動範囲が広がるであろう。そこで、大学へお願いしまして、二輪を買っていただきました。そして、できるだけ体力に自信のある方々を募りまして、被災地をずっと回っていきました。その中で、いろいろなエピソードがありましたが、ひとつだけお話ししたいと思います。

灘区の方だったと思いますが、ある学生の住んでいるマンションが倒壊してしまいました。彼女は、その近く的高等学校か公民館にいるかなと思って探しましたが、見つかりませんでした。マンションの方にきくと、前の公園だとわかり、公園に行つて

みると、例のブルーシートがありました。ブルーシートで囲いを作って、その中にそのマンションの方数名と避難していました。学科が違いましたので、残念ながら彼女の顔もわかりませんでした。とにかく安否確認できていない学生で、名前だけがわかっていました。彼女とは初めて顔をあわせたのですが、前出の学生とは違っていました。彼女は明るかったのです。非常に明るく、「先生、わざわざ来ていただいたんですか、ありがとうございます」と言ってくれました。しかし、横にいらっしゃるお母さんが、涙ぐんでいらっしゃいました。彼女のいない時に、お母さんにちょっとお話をお聞きすると、「実は、あの子は、あごの骨にヒビが入っています」。ということでした。そこで、「もしよろしければ、大学の学生会館に和室があり、被災された方々のために用意致しております。娘さんにも来ていただけましたら、よろしければ、お母さん、お父さんもご一緒にいかがでしょうか」とお話ししたら、「実は主人は、地震からこちら家へは帰ってきておりません」。という答えが返ってきました。お話を伺っていると、お父さんは警察官で、いつ帰って来るかわからない、まったくわからない。震災後すぐに出て行かれたので、ご主人自身も家族のことを大変心配していらっしゃるであろう。(家族が、今こうしてここにいることもわからないのではないか、ということが、だんだんとわかってきました。)
「主人が帰ってきたときにこの近辺にいないければ、また心配します。娘のことは、また娘にきいてみます。私は、有難く思いますが、遠慮させていただきます」。そこで本人に、「どうだ、一緒に行くか」と言えば、「いいえ、私もここへ留まります」。あごの骨にヒビが入っている、まだ19か20歳の娘がそう言ったのです。ブルーシートと簡単に言いますが、非常に暮らしにくいものです。他人と24時間一緒にいて、寒空の下で暖もろくにとれず、朝起きたときも、寝るときも服はいっしょで、風呂にも入れず、トイレもまともにできない状態です。そんな状態では、一日だけでも汚いと思う。そういう私達の、それは同情だったのかもしれません。被災されたその学生に対する同情だったのかもしれません。彼女にすれば、そういうお父さん、お母さんを残して動くことはできなかつたんだと、今になってそう思います。それなのに、動いたらどうだなんて、なんだか正義ぶって、あの時言っていたのかと思えば、自分自身、あれでよかったのか、あんな行動で本当によかったのかなと、正直言ってわからなくなってしまう。

被災して避難所にいる学生の中で、何人かは大学へ来てくれました。そのときに松田先生が、「但尾君、一緒にごはんでも食べに連れて行ってあげよう」とおっしゃいましたので、大学の前の食堂へ焼肉を食べに行きました。食事中、1人の学生が、ふと、「あったかいごはんがおいしいですね。肉よりも何よりも、炊きたてのあったかいごはんが、おいしいですね」と。その言葉を聞いたとき、なんか、我々が一生懸命

用意しているものと、被災者の方が本当に求めているものとのギャップを思い知らされた気がしました。どうやって埋めていいのか、私達にはわかりませんでした。何をどのようにして、ギャップを埋めていくのか。とにかく、私達がベストだ、ベストだと思っていることにまったく違う答えが返ってきてしまう。何が一番かという、やはり、あったかいごはん、これが何よりのようでした。

被災地での学生とのエピソードはこれくらいにしておきますが、是非ひとつ覚えていてもらいたいことを付け加えておきます。私ごとで本当に申し訳ないのですが、私は家を約2カ月空けました。1月から約2カ月間です。毎日ではありませんでした。毎日いようなんて、ええかっと思っていました。でも、本当に疲れてしまいました。途中で、松田先生に「長期戦になるぞ、一回家へ帰って休んで」、と言っていたいで帰りました。そうしたら、動けない。本当に動けない。お恥ずかしい話ですが、病院へ行くと、疲労のためはかなり身体が参っている、ということでした。長期戦になるぞと言われて帰ってきた旨を告げると、「ホントその通りやぞ」と言われました。その医師は、警察病院から個人病院を開いた方ですが、「私の同僚の一人も震災疲労で倒れた」と。必ずしも被災された方だけが倒れるのではなくて、サポートをしていた方も、かなり大きなダメージを受けているのです。約2カ月家を空けたその中で、ストレスがたまったのは母親と女房でした。小さな3人家族の中で、これほど長く空けたのは、結婚後はじめてでした。自分自身の体力的なストレスより、母親と女房の精神的ストレスの方がどれほどすごいか。3人としての家族の和ができていたものが、その内の1人が2カ月欠けることによって、どんどんストレスがたまってしまったようです。母親には、こんなことを言われました。「学生さんのこともいいけど、自分の親戚も神戸にいることを忘れたらあかんで」と。また女房には、「あなたの学生だけと違う、私の学生も神戸にいるのよ。」と言われました。彼女は、運転ができないので、神戸まで来られませんでした。何が言いたかったのか、今になってわかる気がします。

最後になります。我々は、またこの4月に新入生を迎えます。その新入生の中にも、やはり被災した学生がいることを忘れないで、新しい彼女達を迎えたいと思います。

集会での学生からの意見

国文学科3年 長谷川貴子さん

今回はじめてこういう集会がもたれて、震災について話し合うというのは、はじめてだと思うんです。学生の一人として、親和に通う一人として、たとえばまた何か起こらないとは限りませんよね。そのとき学生は、また大学とどう連絡をとったらいいのか。そういう話し合いはまだされてないと思うんです。私は実際に震災を体験していないので言える立場にないと思うんですけど、こういう辛い体験を聞き、こういうマニュアルがあったらこんな不備な点も防げたのにということをなくすためにも、辛いとは思っただけけれども対話が必要になってくると思うんです。今回この集会に参加できてよかったと思っています。

英文学科2年 崎山有歌子さん

私は昨年度8月まで休学しておりまして、9月から復学しました。大学に連絡したら担当教員に連絡してくださいと言われてましたが、私は休学期間中でどの先生のゼミにも属しておりませんでしたので、誰にも連絡できませんでした。こういった学生もいるということを考慮していただき、私のような学生も滞り無く連絡がつくようにしていただきたいと思います。